

※市民生活に目を転ずる時、それらの隣となるように、日の当らぬ多くの部分を見る事が出来る。そしてそこに財政窮屈の声を聞く事が出来る。本編は「ここに錢がほしい」と題しそうした予算増額を望むいくつかの部分にメスを入れてみたい。第一回は足元の公民館予算をとり上げてみました。

市財政の継子 社会教育の充実はいざこ

まず龍丘公民館予算の内訳と年次別推移を見ると別表のようになります。

予算では、昭和三十七年の四十八万七千円を最高に、以後漸減傾向あり、四十一年地財法準用と共に激減した。以後わずかに増加の傾向はあるが、本年度の予算四十四万円を見ても、また数年前には及んでいない。この間物価の値上がりは激しく、「倍、物によつては五倍」もなっている事を考えれば、実質減少である。

内容をもう少し詳しく分析してみると、総予算に占める割合がふえて、実際に活動に要する費用が減少している事。報酬がふえていると言つても、元々安いところへ物価の値上がりを考えれば、それはさうやか過ぎる数値である。

事業部の員手当が今まで年間三五〇円だったものが今年から一千円アップしたという程度のさやかさである。

とすれば、予算四十四万円と、この

状態である。

日刷費の値上がりも激しく、昭和三十七年頃にはタブロイド版(本紙大)が一部五六円で日刷出来たものが最近では十円(二十五円と四十五倍にねえ上っている。

昭和三十七年の十一万余円を物

紙大)が一部五六円で日刷出来たものが最近では十円(二十五

円と四十五倍にねえ上っている。

昭和三十七年の十一万余円を物

紙大)が一部五六円で日刷出来たものが最近では十円(二十五